

第5部 研究の成果と課題

上黒岩遺跡の最初の調査は1962年、それから40年余りの間に、関係者が資料の一部をつかって論を発表し、また概報を利用して上黒岩の調査の成果についての言及がなされ、今日にいたっている。それらの論考についてもふれながら今回の上黒岩遺跡発掘報告書のまとめとしたい。

1 年代と岩陰の利用

上黒岩岩陰の利用は、第3次調査時の最下層の第14層の黄褐色粘土層の時期に始まる〔江坂ほか1967:229〕。しかし、この資料は慶應義塾大学でみいだすことができなかった。概報によると、安山岩製の横長剥片2点であって、瀬戸内技法によるともいう。そうであれば、この岩陰は後期旧石器時代の約28,000年前ころに最初に利用されたことになる。しかし、今回その資料の所在を明らかにできず、旧石器時代に上黒岩岩陰の利用があったことを確認できないのは残念である。

確実な資料で上黒岩岩陰の利用を確認できるのは、第9層の隆起線文土器の時期からである。この岩陰は以後、古墳時代まで断続的に利用されている。層位との関係を示せば次のとおりである(実年代は炭素年代値の較正年代、植生区分は較正年代にもとづいてヨーロッパの基準を仮にあてたもの)。

- 第1層 古墳時代 土師器
- 第2層 縄文後・晩期 約4000年前 サブアトランティック期 温暖期
- 第3層 縄文前期初め 轟式土器 約6000年前 アトランティック期 温暖期
- 第4層 黒色土層 縄文早期中頃 押型文土器 約10,000年前 ボレアル期 温暖期
- 第5層 石灰岩角礫層 第4層とほぼ同時期
- 第6層 黒色土層 縄文草創期後半 無文土器 約12,000年前 新ドリラス期 長期間の寒冷期
- 第7層 破碎礫層 第9層とほぼ同時期
- 第8層 黄褐色土層 第9層とほぼ同時期
- 第9層 褐色粘土層と黒色土層の互層 縄文草創期前半 隆起線文土器 約14,500年前 ベーリング期 短期間の温暖期
- 第10層 青褐色粘性土層
- 第11層 破碎礫層 縦長剥片
- 第12層 青褐色粘性土層
- 第13層 落盤層
- 第14層 青褐色粘性土層 後期旧石器? 横長剥片

すなわち、上黒岩岩陰を利用したのは、第6層の無文土器の時期が寒冷期であるのを除くと、最終氷期のなかでの温暖期である。上黒岩の地は30年前で松山平野よりも冬の気温は2度低く、久万川は凍結するのが常態であった。第6層の時期は遺物も少なく、石鏃が多いことから春から秋の

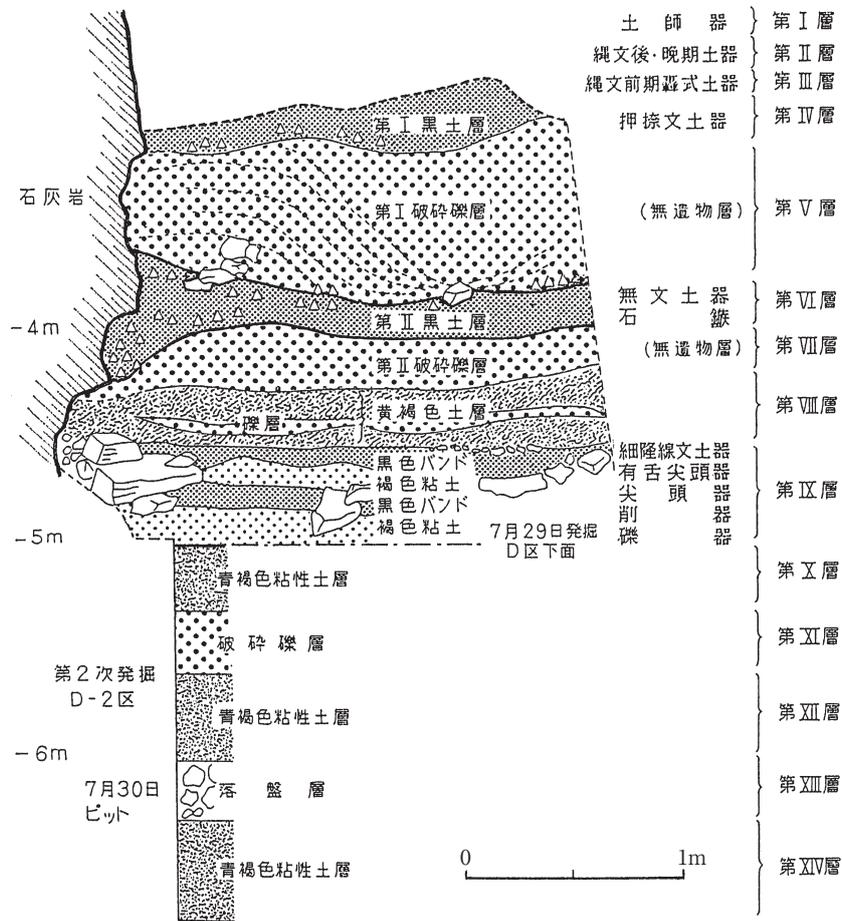


図 295 上黒岩遺跡第2次・第3次発掘区断面図 [江坂ほか 1967]

間に利用したのであろうが、おそらく他の時期も温暖期にあたるといっても冬季の気温の低下は著しいものがあつたらうから、通年利用したのではなく、季節的な利用であつた可能性が高い。ただ、第9層と第4層の時期の利用の仕方には少し問題がある。第9層の時期は、岩陰内で石器をさかんに作っており、有茎尖頭器の出土数は中四国・近畿ではもっとも多く、縄文草創期では唯一の石偶が13点も出土しているなど西日本屈指の遺跡である。また、第4層の時期は、埋葬人骨28体や埋葬犬骨2体が見つかり、人びとのこの岩陰へのこだわりを明らかに看取できるからである。しかし、そのばあいでも、春から秋の季節にこの岩陰を利用し、冬は平地に下りていたとする考えを否定するものでもないだろう。

本報告書で第9層の時期の有茎尖頭器の石材を分析した綿貫俊一は、遺跡付近で採取可能な赤色珪質岩とチャートが主体で、香川県産のサヌカイトが少ないことから、上黒岩、高知県佐川町不動ヶ岩屋、四万十市森駄馬遺跡などの不定形の押圧剥離技術で作った有茎尖頭器は、この地方でサヌカイトが流通する段階以前の古い様相を示し、サヌカイト製の大型で斜行剥離が発達した新しい様相をもつのは、定住の傾向が強まりサヌカイトが流通するようになった「初源的取引・交換システム」が形成された段階と評価している。

現在のところ、瀬戸内の平地から上黒岩と同型式の有茎尖頭器や石偶を出土する遺跡は見つかり

ていない。隆起線文土器については、上黒岩式を設定した小林謙一はその広がりの中四国から近畿・東海西部ととらえている。上黒岩の第9層と第6層の時期の遺跡は、瀬戸内では十分に見つかっていない。近年、岡山県勝央町大河内遺跡、兵庫県丹波市春日町国領遺跡や高知県四万十市森駄馬遺跡が見つかったように、山間部に良好な遺跡がまだ多数埋もれていることはまちがいないだろう。その一方、瀬戸内沿岸部では有茎尖頭器は単独で見つかることが多く、明らかな遺跡を形成している例は稀である。その理由は、この頃の海水面は現在よりも約30m低い位置にあり、瀬戸内海はまだ森林～草原の状態であって、当時の低位段丘は現在の平野の下や海底に埋没し、あるいは現在の標高10m付近から-10m付近までの範囲はその後の瀬戸内海の形成過程で浸食され失われていることによるのではないだろうか。

上黒岩岩陰の各時期における利用期間を考えるうえでもっとも参考になるのは、各層ごとの遺物の量である。土器の破片（細かな破片まで含む）の数は、第9層を中心とする隆起線文土器が約150点、第6層を中心とする無文土器が240点、第4層を中心とする押型文土器が450点である。土器破片の個体識別をおこなったところでは、隆起線文土器は10数個体であった。ただし、この時期は1遺跡から数個体分しか出土しない傾向がつよいから、上黒岩のばあいは、明らかに多いといえる。この点是有茎尖頭器の出土数が日本列島規模でみても傑出していることから裏づけられる。無文土器は5個体を確認しえたので、おそらく10個体未満、押型文土器は4型式に細分できるので、多い時期でも20個体をこえるものではない。こうしてみると、上黒岩岩陰で土器を使用した生活を頻繁におこなったものではないことがわかる。出土遺物が大量であったといっても、それは相対的なものであるといわなければならない。

利用期間や回数が長かったのは、上黒岩遺跡が通路としてもっとも確かな道筋を示す久万川に面しており、しかも石灰岩の白く高い岩肌を露出し特異な景観をつくりだしランドマークとしての意味を合わせもっていたことによるところが大きかったのであろう。久万川が仁淀川の上流にあたることを考慮すると、高知県の太平洋岸にも生活圏は広がっていたことであろう。上黒岩遺跡から出土したタカラガイ、イモガイ、アワビ、ハイガイ、ハマグリ、カキなど海産の貝殻は、そのことをよく示している。

上黒岩遺跡の居住可能な空間の面積は、岩陰の下で雨水が落ちてこないほぼ4m×20m=80m²の範囲であったろう。そこから推定される上黒岩集団の人口は、もっとも多い時でも15人をこえることはなかったであろう。上黒岩遺跡を墓地としても利用したのは、第4層の時期だけであったが、28体の埋葬のうち過半数は幼児であった。狩人が狩猟だけを目的に深山にはいったのではなく、幼児をかかえた老若男女の集団が一定期間ここで生活していたのである。

2 石器と生業

上黒岩遺跡では、一部オーバーラップしながらも木葉形尖頭器→有茎尖頭器→石鎌の順に変遷することが、層的に証明されたとみなされ、槍から投槍そして弓矢への変革が縄文草創期の出来事として存在した、と調査参加者の鈴木道之助は説いた〔鈴木1972〕。すなわち、第9層（細隆起線文土器）：木葉形尖頭器+有茎尖頭器、第7層（細隆起線文土器）：木葉形尖頭器+有茎尖頭器+石

鎌，第6層（無文土器）：石鎌とされた。そして，木葉形尖頭器が長さ4～12 cm，重さ10～50 g以上，有茎尖頭器が長さ2.5～4.7 cm，重さ3～8 g，石鎌が長さ3～1.2 cmの大きさであった。槍というのは「突槍」を意味しているのであろう。有茎尖頭器はそれほど大きなものではなかったけれども，重さが近畿の弥生中期の武器としての大型石鎌の重さをしのいでいることを重視し，矢鎌と考えなかった。

第9層からは，「30余点の有舌尖頭器，小形杏仁形尖頭器を含む70点におよぶ大量の木葉形尖頭器」が見つかったとされた。しかし，それらの石器の認定がどのようになされたかは，石器の実測図の1点も掲載されなかったために，まったく不明であった。

上黒岩では第9層から出土した動物遺存体のなかで主要なものは，ニホンジカ，イノシシ，アナグマ，ツキノワグマ，ニホンザルで，他にカモシカ，ニホンオオカミ，オオヤマネコ，ヒキガエルの遺骨があった。第6層から出土したカワウソ，ムササビ，第4層から出土したテン，タヌキ，ノウサギ，オコジョ，ネズミなども，捕獲の対象であったろう。これらはすべて中小動物であった。

しかし，上黒岩遺跡は更新世末までさかのぼるけれども，更新世を特徴づけるナウマンゾウの遺骨は皆無であって，遺跡の立地からしてもその存在を考えることは無理があった。瀬戸内海でもナウマンゾウはこの時期までくだる例は見つかっていなかった。現在においても，瀬戸内海産のナウマンゾウの骨の年代測定例は乏しく，信頼してよいかと考えられる唯一の例は，諸島沖（広島・松山沖）産の測定結果であって， $38,278 \pm 260$ 年前である〔北川ほか 2008〕。上黒岩では鈴木という木葉形尖頭器＋有茎尖頭器の時期においても，すでに完新世の中小形獣の時代になっていた。したがって，一部重複するとしても，木葉形尖頭器→有茎尖頭器→石鎌の推移を促す自然的要因は上黒岩付近には存在しないので，それは他律的な変化でなければ説明がつかない。すなわち，他地方での変化の影響を受けて上黒岩の集団でも変化が生じたということである。

なお，ヤベオオツノジカについては，広島県東城町帝釈馬渡岩陰（標高450 m）の第5層から安山岩製の小型横長剥片を伴って上顎骨片が出土している。無文土器，木葉形尖頭器，石鎌を伴う第4層（炭素14年代= $12,080 \pm 100$ BP）よりも下位の層であって，石器は後期旧石器時代末の可能性がよい。また，愛媛県城川町穴神洞（標高約300 m）から隆起線文土器に伴ってオオツノジカの歯牙が出土しており〔長井 2004：64～67〕，これが縄文草創期の唯一の例となっている。したがって，同じ四国に住んでいた上黒岩の住人たちがオオツノジカと遭遇する機会がなかったとはいえない。

上黒岩遺跡の出土の動物骨は今回の調査でもニホンジカとイノシシが主であって，第3次調査までの概要をまとめた金子浩昌の報告〔金子 1967：442～448〕を追認することになった。ただし，第2次調査時にA区第4層の埋葬人骨に伴った2頭の埋葬イヌ〔江坂ほか 1967：226，231〕については，標本の所在が明らかでなく，今回の報告から落ちてしまったことは，それが押型文土器の時期までさかのぼる縄文時代最古例であっただけに，まことに惜しいことであった。

さて，鈴木を示した図式は明快であったために，佐原真は木葉形尖頭器が突槍，有茎尖頭器が投槍で，槍から弓矢へ発展したとする鈴木説を採用しつつも，日本列島では弓矢が出現する前後に動物相の大きな変化がないので，弓矢は大陸で発明され完成した形として日本列島にもたらされたと考えた〔佐原 1975：35～37〕。鈴木説は，佐原のわかりやすい説明によって大いに普及することに

なった。

しかし、今回、綿貫俊一が全石器に目を通したところ、鈴木という木葉形尖頭器の認定には大きな疑問が生じるようになった。すなわち、その大多数は石篋または一種の石斧とそれらの未成品・失敗品であり、さらに有茎尖頭器の未成品・失敗品などであることが判明し、有茎尖頭器が60点をこす一方、木葉形尖頭器は10点に満たない少数になってしまった。さらに、石鏃は第9層から2点出土していることが明らかになった。綿貫は統計を十分にとることができなかったことを断りながら、石器のほうから層の統合をはかって、上黒岩遺跡の各時期の石器組成を明らかにしようとしている。それによると、第9層を主体とする第7～11層の隆起線文土器の時期は、有茎尖頭器62点、小型木葉形尖頭器8点、石鏃7点、石斧1点、小型石斧3点、石篋75点、矢柄研磨器1点、有溝砥石1点、石器製作用敲石1点、石匙1点としている。第6層の無文土器の時期は、石鏃17点で石鏃が著しく増加し、凹石・磨石、敲石が目立って多い。有茎尖頭器1点は本来は7～9層に含まれるべきものであろう。4層を主体とする第4～5層の押型文土器の時期は、凹石・磨石、敲石に加えて石鏃(32点以上)、石錘(5点)が増加する傾向にあることを指摘している。そして、第6層と第4層に多い凹石と敲石については、植物質食材の加工用と考えがちであるが、上黒岩遺跡では動物の骨髄をさかんに食べていることから、骨を割る道具として用いた可能性を考慮する必要があると論じている。骨髄食が他の遺跡や時期よりもさかんであったとすれば、それは嗜好の問題なのか、それとも押型文土器の時期に食糧の供給が十分でなかったことを意味しているのか、この時期の人骨が華奢であるとの指摘とあわせ、これから追究していくべき課題である。

以上、第9層の時期に有茎尖頭器に少量の石鏃が伴う事実を認めたとうえで、全体の流れとしては有茎尖頭器から石鏃へと推移していくことは、日本列島各地での事例から考えてよいだろう。しかしそのことは、石鏃が有茎尖頭器から生まれたことをただちに意味するわけではない。上黒岩遺跡第9層の石鏃はおそらく弓矢の鏃として完成した形ではいってきただけであって、その数の少なさは有茎尖頭器がその形態をのこしながら小型化して実際には石鏃として使用されたことを暗示しているように思う。

上黒岩遺跡に住んだ人びとは、投槍や弓矢の狩猟具を使って、ニホンジカ、イノシシを主に中小動物を捕獲し、おそらくクリ、クルミ、各種の草木の芽や根茎などの植物質食料の採集を主な生業として生きていたのであろう。

3 上黒岩式土器

本報告書で、上黒岩遺跡第9層発掘の隆起線文土器にたいして上黒岩式土器の型式名を与えることを小林謙一は提案した。その内容は、口縁部から縦位・斜位隆起線の文様帯の構成、口唇内側の隆起線、短い隆起上線、瘤状添付文を型式の指標とする。この型式に含まれる資料は、これまで高知県十和村駄馬崎で見ついているにすぎない。時期的に併行する土器型式は中四国・近畿では知られていないので、分布範囲を明確に示すことはできない。隆起線文土器を3時期に細分すると、上黒岩式は関東地方よりは1型式新しい花見山2式と併行する。同じ四国の高知県不動ヶ岩屋や愛媛県穴神洞は最後の隆起線文土器である花見山3式と併行する。上黒岩式土器の炭素年代の較正年

代は14,500年前頃である。

隆起線文土器の存続幅は15,500年前頃～13,800年前頃で、その期間は1,200ないし1,700年間と見積もられ、きわめて長期にわたっている。上黒岩遺跡の最初の調査から40年以上を経過し、縄文草創期の遺跡は多数見つかるようにみえて、資料はまだきわめて乏しいことがよく理解できるだろう。

さて、縄文草創期には1遺跡から出土する土器の量は極端に少ない。上黒岩で隆起線文土器10数個体を確認できたのは、むしろ例外である。有茎尖頭器の出土数も例外的に多いことから判断すると、これはこの岩陰を利用する機会が多かったことを意味しているのであって、ある1時点での土器の保有量は1,2個体でいかにすぎなかったと考えるべきであろう。

かつては土器の出現は、磨製石斧・弓矢の出現とあわせ後氷期の温暖化した環境への人類の適応現象と理解された〔近藤 1965〕。その当時は関東地方の撚糸文土器を最古の土器とするのが定説ではあったけれども、それに先行する長崎県福井洞穴や上黒岩遺跡の隆起線文土器の存在と、12,400年前という炭素14年代の測定結果はすでに知られていたものであった。

しかし、土器の出現が最終氷期の最古ドリラス期をさかのぼるようになり、しかも草創期の土器の保有量の少なさを考えると、土器は出現したときと普及したときとは、その用途は同じでなかったこと、すなわち出現と普及の契機は区別して考察しなければならなくなった。

日本列島と同じく土器の出現が更新世末、15,000年～14,000前までさかのぼっているのが、シベリア・極東（ザバイカリエ、アムール中・下流域、ウスリ流域から沿海州沿海部）である。ここでは、植物質の食料はまだ期待できないことから、土器の用途についてツングース族の例を参考にして、内陸の河川・湖沼の魚類に多くを依存する集団が魚類からニカワ、調味料、灯油に使うための魚油の製造用に土器を使ったというV.E. メドヴェージェフの説〔メドヴェージェフ（梶原訳）1994〕がよくとりあげられる〔梶原 1998：302，小畑編 2004：62，2005：46〕。しかし、この地方でも、出現期の土器の量は少ない。日本列島と同様、土器はまず特殊な用途をもつ道具として出現し、よりのちに用途が拡大し、魚油製造などのために多量に製作するようになったと考えたほうがよさそうである。谷口康浩は、日本とロシア極東地域は土器の出現年代が近似していること、当時の石器文化に共通要素があることから、「北方寒冷地に共通する何らかの土器使用法があった」ことを予想している〔谷口 2005：48〕。

現在最古の土器の位置を占める青森県大平山元I遺跡の無文土器や、隆起線文土器の最古段階ともみなしうる神奈川県上野遺跡の土器、そして上黒岩遺跡の土器にも、煮沸に用いた証拠に炭化物の付着が認められる。したがって、出現期の土器がなんらかのものを煮沸するのに用いられたことは確かである。しかし、それが魚油の製造のためであったというのであれば、その魚油は特殊な用途をもっていたと考えなければならなくなる。

土器が、それ以前の獣皮袋や編籠・樹皮籠などの形状を忠実に引き継いでいることは、確かであろう〔小林 1994：54～59〕。しかし、それらに粘土を貼りつけ焼成し、あるいは粘土で模倣して焼成することによって煮沸可能な容器を生みだしたとしても、土器の用途は一般的な煮沸の需要にこたえるためであったわけではない。やはり土器の量の少なさが問題になるのである。少量のものを煮て作るために稀に使うというのであれば、その行為は日常的な調理ではない。最終氷期のうちに

出現し、ごく少量を使用していたことが判明したいま、初期の土器の用途については、薬草（ドクダミ、ヨモギ、ユキノシタ、フキ、キハダ、ミズノキなど）を煮て薬をつくるとか、何か特別な用途をあらためて追究していかなければならない。特に縄文草創期という時期は、有茎尖頭器・石鏃、土器、磨製石斧、石偶の出現など、中四国ではのちの押型文土器の時期にくらべるとかえって文化的に充実しているところがあり、その文化つまりは生活の活力の源泉を探る必要がある。

4 石偶から子安貝へ

上黒岩遺跡から石偶すなわち上黒岩ヴィーナスが最初に見つかったのは1962年の第2次調査のときであった。それから45年の月日が経った。その間、隆起線文土器などを出土する縄文草創期の遺跡は多数見つかった。しかし、上黒岩ヴィーナスの類例は他の遺跡からはまったく見つからない。骨牙製品ではなく石製品であるから、腐蝕して消滅することはない。骨牙製品が普通で、上黒岩ヴィーナスは珍しくも石製品であったので、今日までのこったということであろうか。それにしても1点や2点は他の遺跡からも出土してもよいのではないかといいたいけれども、長崎県福井洞窟の有孔円板（石製の2点と土器片製の1点）も、類品は宮崎市上猪ノ原遺跡以外には見つからない。事情は十分に説明できないけれども、上黒岩遺跡と厳密な意味での同時期の遺跡がまだ十分に見つからないために、第2、第3の例が出土していないという事情もあるのだろうか。

線刻礫の類例は、大陸側では沿海州の早期新石器時代のルドナーヤ＝プリスターニ（テテューヘ）遺跡から、直径6～9cmの小さな礫で作った「彫刻もしくは装飾品」が出土していることについては、第4部第6章でふれた。一端に長軸に並行に4～17本の線刻をもつ細長い礫は、上黒岩にかなり近いといってよいだろう。上黒岩では、女性の髪であったけれども、この遺跡の縦線刻もウクライナのメジン遺跡出土の旧石器時代ヴィーナスを参考にすれば、上半部は頭部の表現であると筆者は推定する。

このように、沿海州の線刻礫は、髪と女性器を表現した女性像から髪のみになった女性像とみなし、ユーラシア大陸の旧石器時代ヴィーナスの後裔であると私はみたい。線刻礫は地域と時期を問わなければロシアでは他の地方からも見つかったので、このような資料が大陸にはまだ多数埋もれており、時間的にも長期に及んでいる可能性を予想しておきたい。

隆起線文土器・部分磨製石斧・有茎尖頭器、矢柄研磨器のあり方からすると、上黒岩遺跡は隆起線文土器の時期の東日本系文化の西の端に位置する。すなわち、文化の流れを東から西と考えるならば、この石偶も上黒岩の石偶はけっして孤例ではなく、東日本から伝わってきた要素であって、さらにはユーラシア大陸とのつながりをもつ可能性があることを暗示している。

上黒岩の石偶は、乳房を表現した例とそうでない例があった。前者を女性とみるの的一致していたが、後者については小児とみる説、男性とみる説があった。今回、計13点の全資料を複雑な表現から単純な表現へと配列し、その間の変化が漸移的であることを確認した。また、同時期のヨーロッパやシベリアのヴィーナスのなかに女性器をあらわしながら乳房の表現を省略した例が少ないことから、上黒岩の乳房のない石偶は表現の簡略化が進行した結果であって、すべて女性をかたどった石偶であると理解した。

石偶の出土は第9層からだけで、あと線刻のない楕円形小礫4点はすべて第7層に含まれていた。さらに注意すべき資料は、第6層から出土の線刻した長い棒状の礫、そして第4層から出土の穿孔した子安貝の殻である。これらが出産と関係する呪物であるとすれば、上黒岩の岩陰は産所であり、そして墓地として使われることもあったのである。出土人骨28体のうちに成人が8体、のこりの未成人のうち8割を乳幼児が占めていた事実は、産育がたいへんであった当時の事情をよく物語っている。琉球列島の近世の例を参考に、上黒岩の石偶や子安貝は出産のさいに母親が手に握って安産を祈った呪物であったと解釈しておこう。

5 埋葬人骨

1969年8月の上黒岩遺跡第4次調査時に、岩陰東端の最奥部に位置するA区とA拡張区から多数の埋葬人骨が発掘された。すべて「第1黒土層」からの出土で、第4層の押型文土器の時期に相当する。その点は遺体に押型文土器の大きな破片をかぶせていたことから明らかである。縄文早期の人骨としては、新潟県室谷洞窟発掘の人骨が保存状態が良好で量的にも豊富にあるが、総論だけで個々の人骨のデータは公表されていない〔小片 1981〕。

したがって、今回、上黒岩遺跡の1遺跡から多数出土した縄文早期のきわめてまとまりのよい人

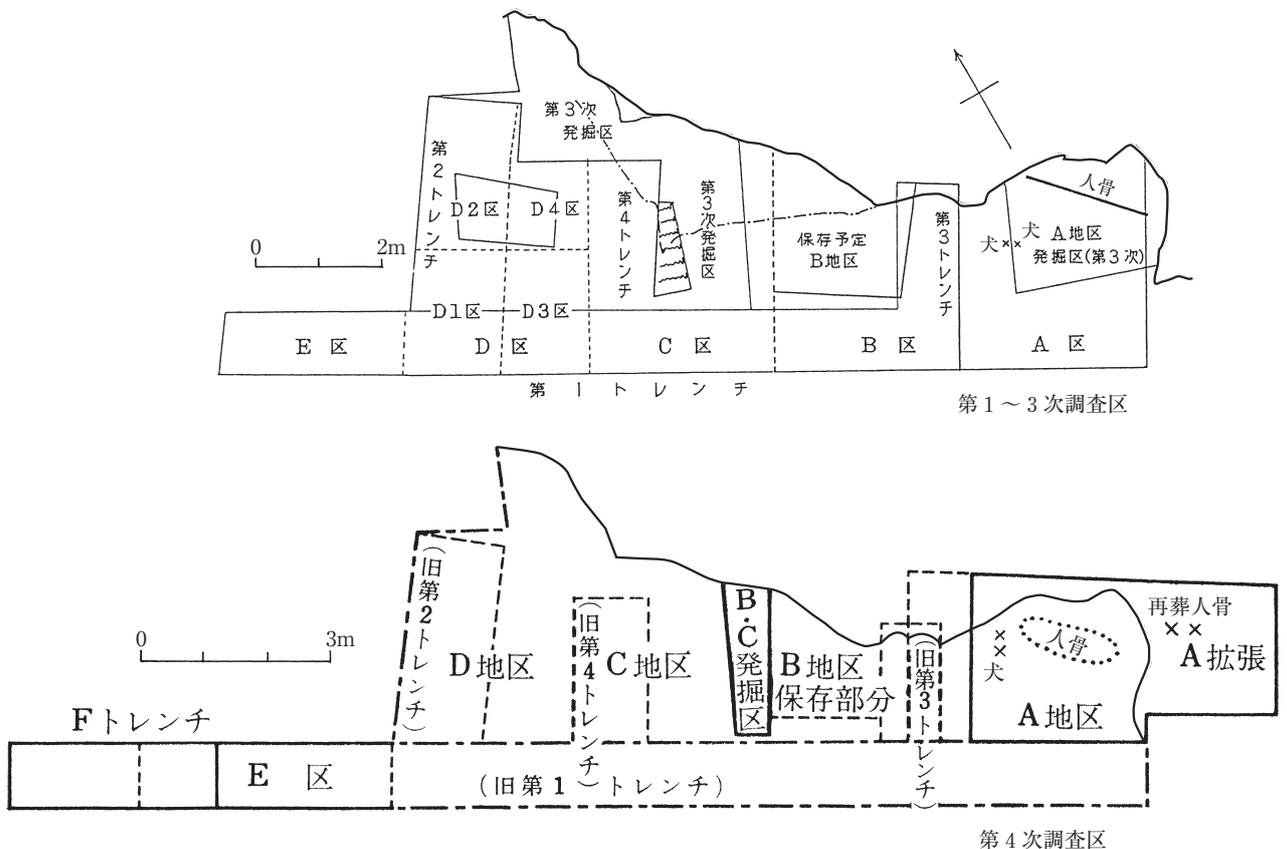


図 296 上黒岩遺跡の埋葬位置 [江坂ほか 1969]

骨の調査結果を報告できることは、沖縄県港川例を除くと後期旧石器時代の人骨がきわめて断片的であり、それにつづく縄文草創期の人骨は皆無、早期の人骨もまた神奈川県平坂貝塚、栃木県大谷寺洞穴、埼玉県妙音寺洞穴などからそれぞれ1個体の出土例だけの状態であるので、縄文時代初期の人骨の形質を解明するうえで貢献するところは大きい。

出土人骨 28 体は、男性 3 体、女性 8 体、未成人 17 体から成る。

これらのうち発掘時の記録などから一次葬（単葬）と推定しうる遺体は、6104 号（女、熟年）と 6105 号（女性、成人）の合葬人骨 2 体、62 E 1 号（女、壮年）と 62 E 2 号（男、壮年）の合葬人骨 2 体、69 E 5 号（女、熟年）、6905 号（乳児）、6906 号（新生児）の計 7 体である。

その一方、6901 号（男、熟年）・6902 号（女、熟年）と 6903 号（幼児）の合葬人骨 3 体は再葬、69 E 2?（男?, 熟年）、69 E 2'（女、熟年）、69 E 4（女、成人）、6907 号（幼児）は部分骨であって、再葬の可能性のほか、散乱骨であった可能性がある。

このように、上黒岩遺跡の押型文土器の時期の埋葬法は再葬と合葬の頻度が高く、後の時期の埋葬法とはかなりの違いが認められる。定住生活以前の遊動生活をおくっていた縄文早期でありながら、この岩陰では生活の場として利用する一方で、なぜこのように多数の埋葬をおこなっているのであろうか。このことが特異な現象でないとすれば、彼らは遊動生活をおくっているとはいえ、遊動している最中に死者がたばあいにはその場その場で埋葬していたにせよ、特定の場所すなわち墓地を定め、最終的にはそこに遺体を運び再埋葬していたことになろう。

上黒岩の墓地に埋葬された成人は男性 3 体、女性 8 体で、男性の遺体が女性の半数に満たなかったのは、深山に踏み入って狩猟しなければ生きていけなかった当時の男性の厳しい生活を暗示するとともに、この遺跡の性格を示唆しているのであろう。

いずれにせよ、上黒岩遺跡の墓地は、これまで明らかでなかった縄文早期の遊動する人たちの生活と埋葬法的一端をここに示していると理解することも可能であろう。

6 受傷人骨

1969 年 8 月の上黒岩遺跡第 4 次調査時に、岩陰東端の最奥部に位置する A 拡張区から発掘された 3 体合葬の再葬人骨のうち 6901 号の番号を付けられた人骨の右寛骨には、腸骨翼に外側からへら状の骨器（長さ 9.8 cm、幅 1.8 cm、厚さ 2.0 mm）が突き刺さっており、創傷部に治癒の痕跡はまったく認められない、と報告された [江坂ほか 1970、森本ほか 1970 : 239~241]。縄文時代では石鏃以外の利器が刺さった唯一の例で、しかも縄文早期、押型文土器の時期まで遡る例でもあったために、最古の殺傷人骨として注目され、各種の図録や本に掲載されて有名になった [朝日新聞東京本社編 1975 : 25、小片 1981 b : 198、佐原 1987 : 175~176、ほか]。人骨の性は男性と判定されていたので、殺傷の原因として、「暗夜岩頭に立ち獲物をねらううち、腰をかがめて獲物を追う人のうしろ姿を熊などと誤認して高い岩頭から槍を投げてしまったのではなかろうか。腰の背後から腸骨を貫いて腹腔に貫いているのである」との推測があった [江坂ほか 1969 : 18]。

しかし、この受傷人骨は一つの墓穴に再埋葬された 3 体合葬人骨のうちの 1 体であったから、本来ならば、出土の状況も考慮して、受傷の意味についても考察すべきであった。

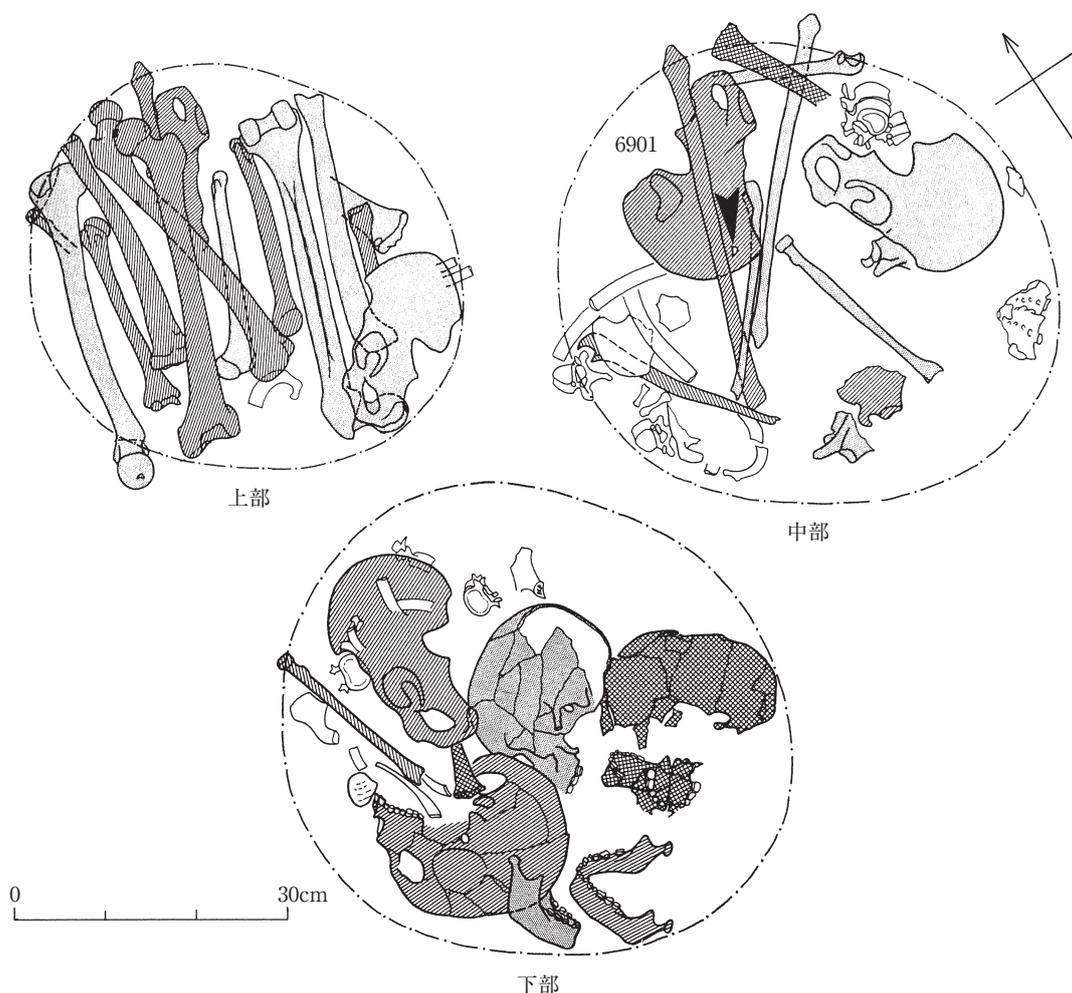


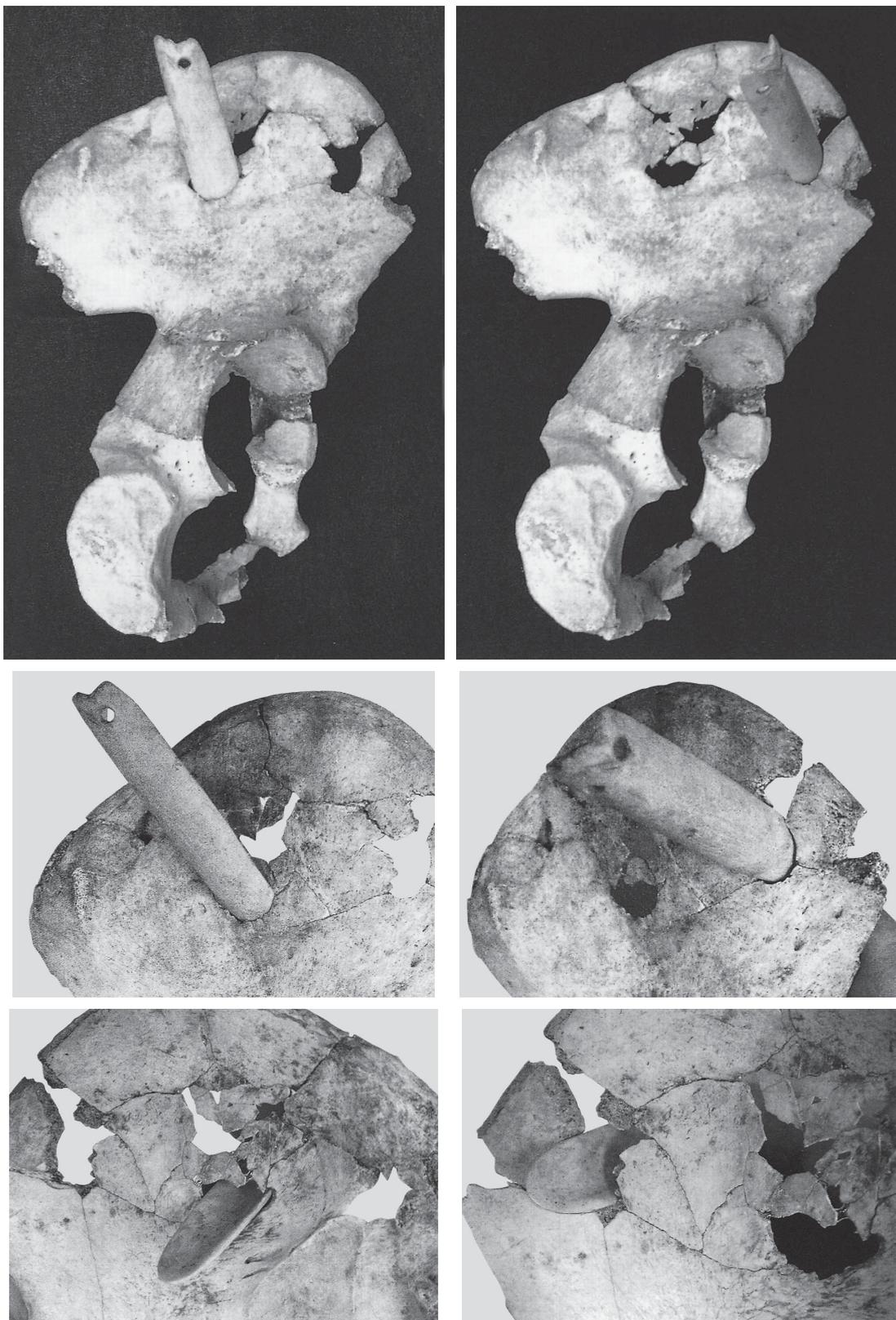
図 297 上黒岩 6902 号人骨の出土状態 [森本ほか 1970] 中部の矢印の位置に刺さったヘラ状骨器

3体の内容は以下のように報告された。人骨番号は頭骨に付けられたものである。

6901号 壮年 男性, 6902号 壮年 男性, 6903号 幼児

再葬は、ほぼ円形の墓穴（径55cm、深さ30cm）に、まず3体分の頭骨をおき、その隙間に椎骨や肋骨、手足の骨など短小な骨を詰め、その上に肩胛骨や寛骨など扁平な骨をかぶせ、さらにその上に大腿骨や脛骨などを長軸を平行に揃えておいたあと押型文土器の大きな破片と平らな石でおおっていた（図297）。

受傷人骨の右寛骨は、寛骨臼を下にしていた内側を上にしてほぼ水平におき、ヘラ状骨器は先端が上を向いて約3cm突き出していた。このような再葬の形式は、縄文時代後・晩期の集骨葬と基本的に変わるころはなく、地面を掘ったところ偶然、古い埋葬人骨に遭遇したために再埋葬したというのではなく、意図的に掘り出して埋め直した儀礼的な行為ととらえるべきであろう。そのばあい、生活空間を広げるために岩陰の手前よりに埋葬してあった遺体を掘り出してより奥部に移したということもありうるだろう。しかし、上黒岩遺跡は押型文土器の時期に合計28体に達する大量の遺体を埋葬した全国で例をみない縄文早期の墓地遺跡でもあって、生活の場でありながら、



1 B孔に刺さった状態（復元）

2 A孔に刺さった状態

図 298 上黒岩 6902 号人骨の右寛骨（上・中 前面，下 後面）と刺さったヘラ状骨器

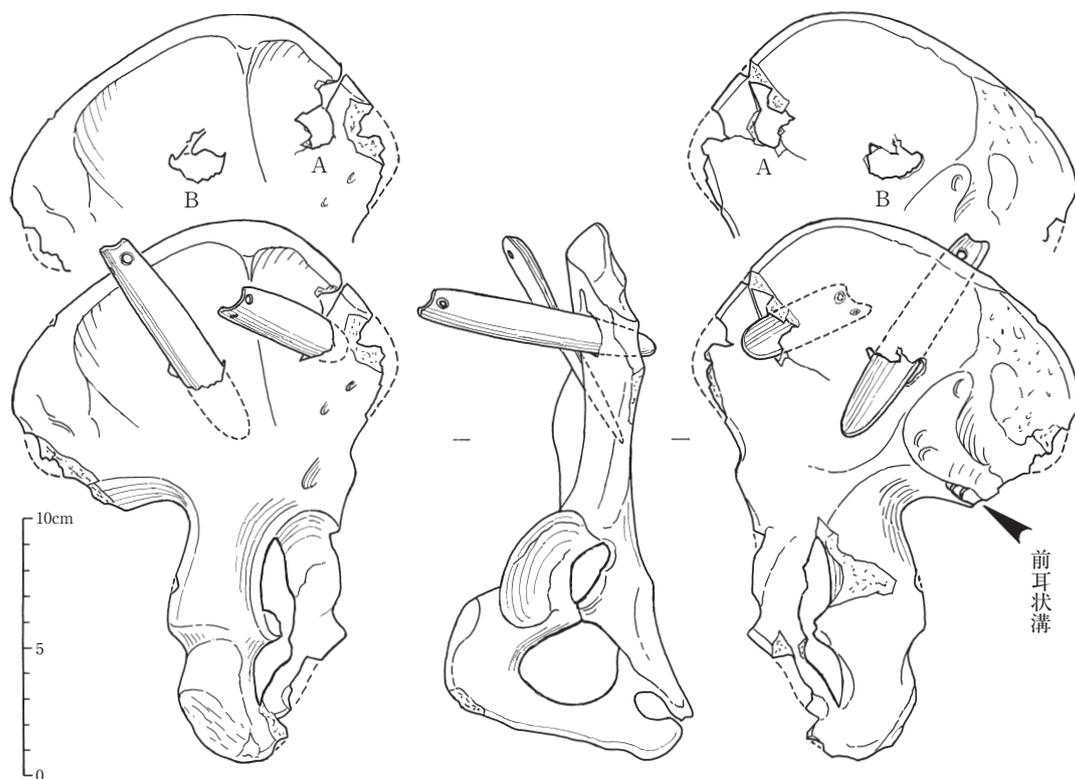


図299 上黒岩6902号人骨の右寛骨と刺さったヘラ状骨器

墓地の様相をつよくもっている。上黒岩遺跡が季節的な利用であったことを思い起こすならば、たとえば冬季に平地で亡くなった人を仮埋葬しておき、夏季に遺体を上黒岩遺跡まで運び再葬したと考えたほうが可能性としては高いのではないだろうか。受傷人骨の問題は、このような脈絡のなかで考察すべきであろう。

さて、6901号人骨のヘラ状骨器は、「上前腸骨棘から約3cm後方、腸骨稜の約2cm下方の腸骨翼に、骨器の凹面を内側後上方に向けて、右外側後方や上方から刺入している。骨器の先端は刃こぼれもなく腸骨窩から大骨盤腔内に約3cm突出している」。刺入孔の腸骨翼の内側には「骨器の凹面に対応する創縁に沿う小範囲の骨の喪失があり」、それは受傷時の破碎骨折と推定し、「右外側後方や上方から骨盤に刺入している」ことを指摘し、ヘラ状骨器は、基部の2孔を着柄用とみて、木製の長い柄に装着した槍の先端部と推定した。

そして、「腸骨翼がまだ比較的新鮮な軟部組織におおわれていたとき、すなわち生前または死後短時日のうちに、ヘラ状骨器が遠からぬ距離から、かなりの高速で刺入したことを示す」と推論したように、報告者は「骨器による損傷が死後のもの」という可能性も捨てなかった。

このように、報告者は二つの可能性を想定していたけれども、一般には生前に刺さったという可能性のほうだけを採用し、事故による受傷または故意の殺傷の結果とみなしセンセーショナルに扱うようになってしまったのは、遺憾というほかない。

さて、問題の3体合葬人骨を今回、中橋孝博が再調査した結果は以下のとおりになった。

6901号 熟年 男性、6902号 熟年 女性、6903号 幼児

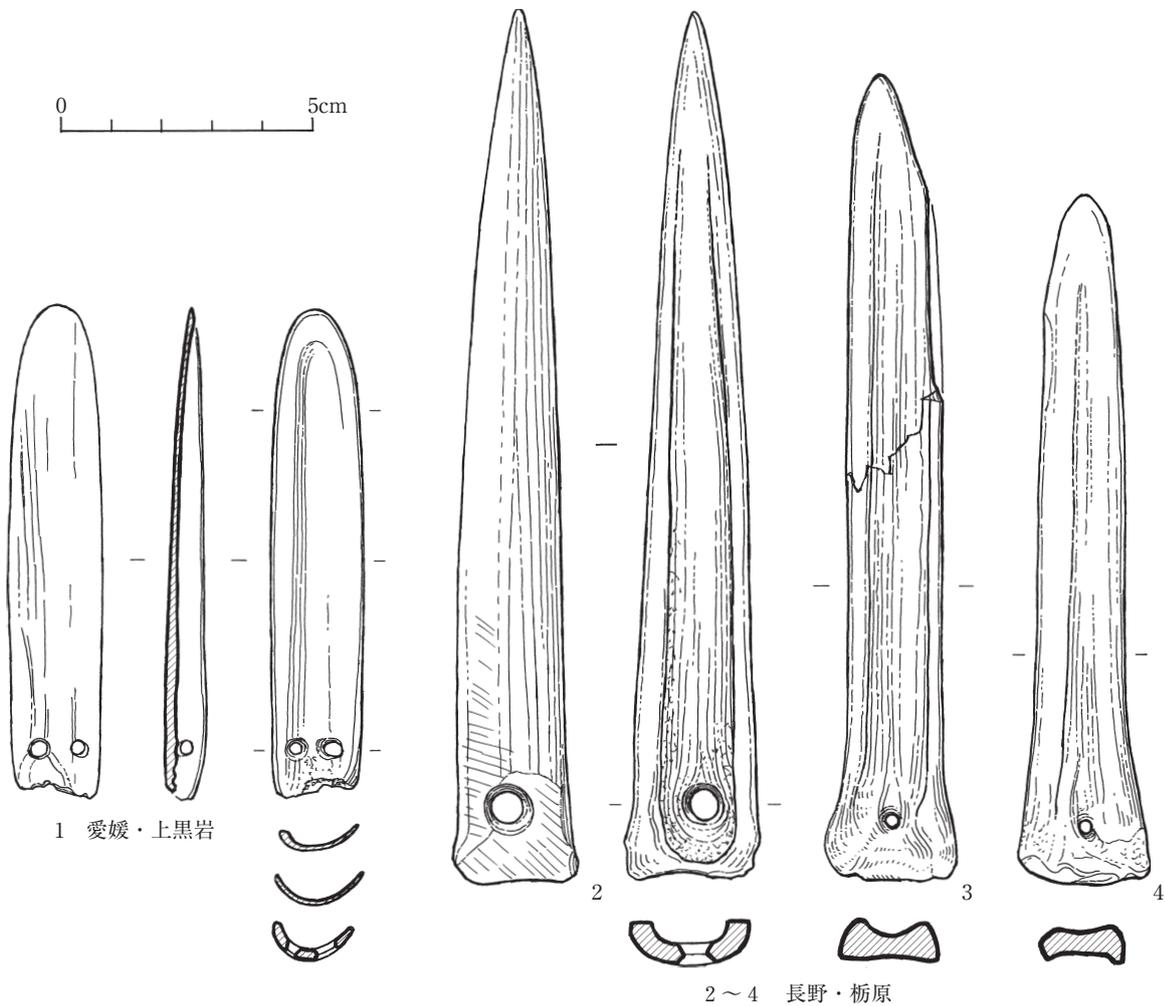


図 300 上黒岩 6902 号人骨のヘラ状骨器と長野県栃原原陰出土の骨製刺突具 ([西沢 1982], 2 の左は写真から作成)

すなわち、6902 号人骨は、頭蓋の大きさが著しく小さく、四肢骨もやや小さく筋付着部の発達と比較的弱く女性とみなされた⁽¹⁾。そして、ヘラ状骨器が刺さっていた 6901 号の寛骨とされた寛骨は、恥骨の形態、明瞭な前耳状面溝の存在から複数の出産を経験した女性と判定され、6902 号の熟年女性の頭骨に対応することが明らかになった (第 3 部第 7 章)。このように受傷寛骨の性判定にきわめて重大な変更があった。

さらに、骨器が刺さっている前上棘に近い位置にある刺入孔 (A 孔と呼ぼう) から 4.5 cm 隔たった腸骨翼の中央に凹面が前者の欠損 (幅 1.5 cm, 高さ 0.5 mm) よりもやや大きい三日月形の欠損 (幅 2.0 cm, 高さ 0.7 mm) がきわめて明瞭に認められた (B 孔と呼ぼう)。内側の下縁つまり外湾側には明らかな剥離痕がのこっており、その状態は前者と変わるところはない。同じ骨器を凹面を上にして挿入してみると、先端は約 5 cm 内側にとびだす。推定すれば、骨器は現在の位置に突き刺さる前に、それよりわずかにずれた位置にほとんど同じ方向から 1 度突き刺し、それを抜いたあともう 1 度刺していることになる⁽²⁾。

骨器は右後ろから寛骨に刺さっているから、寛骨のこの位置に刺さるには殿筋を貫通しなければ

ならない。しかし、槍あるいは短剣状の利器でその動作を生きている人に対して行うというのは1回だけでも不自然であり、それを2回くり返すともなるといっそう不自然さを増す。さらになぜ、最後に遺体から骨器を抜いてやらなかったのか、大きな疑問がのこる。そもそもこの骨器は、海綿質を完全に除去し先端から縁辺の基部近くまでいねいに研磨して鋭い刃部状に加工してあるけれども、先端の平面形は円みをもち断面がU字形（半弧形）となる、あくまでもヘラ状骨器であって、シベリアなどで見つかった骨角製の先端を鋭利に尖らせた断面紡錘形系の槍先や、同じ押型文土器の時期の長野県北相木村栃原岩陰出土の尖鋭な「骨製刺突具」とくらべると、これを狩猟用の尖頭器として同列に扱うことはできない。魚類はともかく、獣類を相手にする利器としてこの骨器は適切な形態とはいえないのである。

上黒岩のヘラ状骨器については、基部の2孔の機能も問題である。これを槍あるいは短剣とすれば、柄に着けるための紐孔の可能性も考えるけれども、着柄には紐孔を必要としないのが普通である。この孔は着柄する前に使っていたさいに、紐を通して結ぶか、下げるためのものであった可能性も否定できない、と筆者は考える。ヘラ状骨器に近い遺物を他に求めるとすれば、中国遼寧省査海、河北省天津市牛道口、黒龍江省小南山、慶尚北道厚浦里など東北地方新石器時代早期の遺跡から出土した石製装身具としての「匙形器」である。上黒岩の骨器と同じように片面が匙状に凹んでいるのは、その起源が骨製品にあったことによるのであろう。その類品が福井県あわら市（旧、金津町）桑野遺跡の墓穴から出土した縄文早期末～前期初めに属する「ヘラ状垂飾り」である〔藤田 1996：173～176、大賀 2004：37〕。これは、平面形は先端が尖っていないけれども、先端部は鑿状の刃部をもつように仕上げている。上黒岩の受傷人骨にのこっていたヘラ状骨器は、尖頭器として類例がないだけに、本来は装身具であって、それに柄を着けて槍先または剣先に転用した可能性も考慮しておくことにしたい。

この受傷人骨については、これまでは生きていた男性に1回刺しただけであるという前提のもとに解釈をくだしてきた。しかし、上記の不自然さをあれこれ総合して考えなおしてみると、むしろこの女性が亡くなってまもなく、遺体を右寛骨が上になるように固定した状態で2回突き刺した、おそらく実際には2回だけではなく骨まで至らない突き刺しも腹から腰付近に何回もおこなったあと最後に寛骨を貫通するまで突き刺した、と解釈するのが妥当ではあるまいか。そして、最後に骨器を突き刺したまま放置していたのは、むしろ意図的なものであって、なんらかの病気で亡くなった女性に対する儀礼行為としての処置であったのであろう。女性の腰の部分に骨器が刺さっており、その女性が妊娠痕をもっていたという事実は、出土人骨のなかに新生児や乳幼児の例が多いことと関連づけるならば、この女性が出産時に死亡し、そのことに対する儀礼的処置であった可能性が思い浮かぶ。その点では、埋葬時に遺体の胸や腹の上に大きな石をおき死者の霊が迷奔するのを防ぐという抱石葬に通ずるところがあろう。

受傷人骨は弥生時代に著しい。なかには、大阪府豊中市勝部遺跡（弥生中期）の3号男性人骨のように、腹部背後の左上から打製石剣（長さ17cm、幅3.5cm、先端はわずかに欠損している）が刺さった状態で埋葬された例がある（図302-1）。報告者は「生前に背中を右後方から腰にかけて突き刺したような状態で負傷したものであろう」と述べている〔勝部遺跡発掘調査団 1973：44～46〕。しかし、近畿地方の弥生中期の石剣は、柄をつけることなく掌で握って使用するから、身体に突き

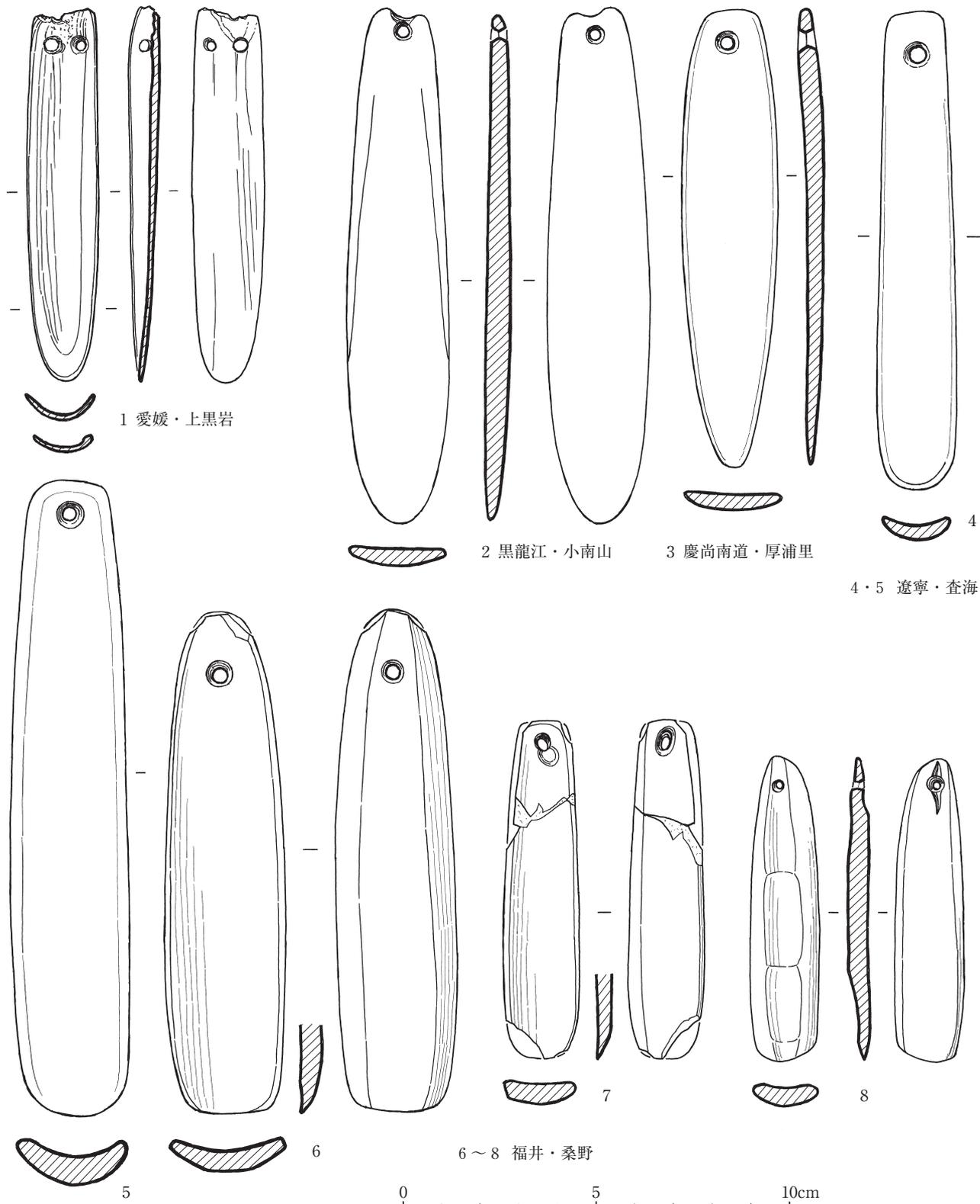


図 301 上黒岩 6902 号人骨のヘラ状骨器と他遺跡出土のヘラ状垂飾り ([大賀 2004] ほか)

刺さるのは6～7cmが限度である。逆しがついているわけでもないので、刺入してもすぐ抜くことができる。にもかかわらず、抜いていないのは上黒岩と同様であって、死後に突き刺してそのまま埋葬した可能性が大きいことを示している。この人骨の「頭蓋骨は、埋葬の前後に故意に破壊されたような状態であった」というのも、死後の儀礼との関係で説明すべきであろう。

多数の石鏃を身に受けて埋葬された弥生時代の例は、佐賀県吉野ヶ里SJ 0312号甕棺墓（後期初め、9点+サメ歯鏃1点）、山口県下関市土井ヶ浜124号人骨（前期、12点+サメ歯鏃2点）、岡山市清水谷2号木棺墓（後期、20点）、兵庫県神戸市新方3号人骨（前期、17点）、大阪府東大阪市山賀9号墓木棺墓（前期、4点）、大阪府枚方市雁屋1号方形墳丘墓2号木棺墓（12点）、京都市南区東土川ST 385619号木棺墓（中期、12点+磨製石剣7～8点）、京都府久美浜町豊谷1号墓（22点）、島根県友田SK 21号木棺墓（前期、16点）、同SK 22号木棺墓（前期、18点）などから見つかっている。それらのなかには土井ヶ浜や吉野ヶ里のように磨製石鏃を含んでいたり、山賀のように特別に大型の石鏃を含んでいたりする。また、雁屋、東土川、清水谷では、凸基・有茎式が100%を占めており、石鏃の一般的な構成とは異なっている。

これらの事実にもとづいて松木武彦は、「通常の戦闘以外での殺人行為が存在し、その中には儀礼的なものと、刑罰に近いもののが存在した可能性」を考え、さらに死後に「遺体の加工儀礼の一種」として矢を集中的に射込んだ可能性も考えている〔松木 2000：72〕。

これらの石鏃が棺内にのこっているばあい、胸部付近または上半身に矢鏃が集中している例が多く、生前に刺入したとすれば確かに儀礼的？殺人や刑罰に近いものもあるかもしれないが、木棺に納めて通常の埋葬法をとっているのだから、やはり不自然の感は免れない。

土井ヶ浜の14点の矢鏃を受けた男性人骨（図302-2）について、「頭骨だけがこなごなに砕かれている」ことから、非業な死を迎えた男の「危険な死霊の再帰を防ぐため」に、死後に刺した可能性があることを金関丈夫は早く指摘している〔金関 1975：10～13〕。その後、同人骨を精査し、頭蓋骨と左側肋骨・寛骨に受傷痕を認めた山田康弘は、矢鏃の射入角度から、「自然に立った状態で撃ち込まれた」とみるのは疑問としている〔山田 1999：31～33〕。

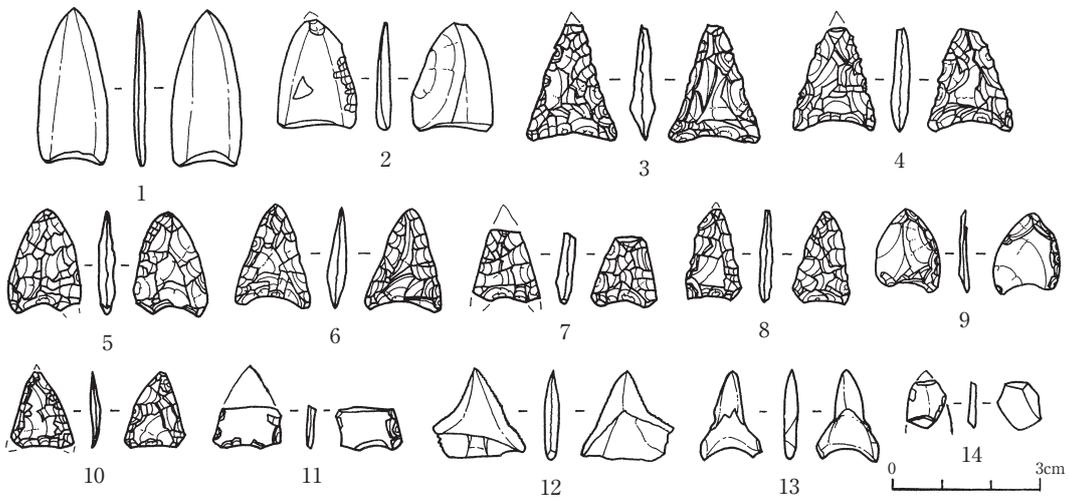
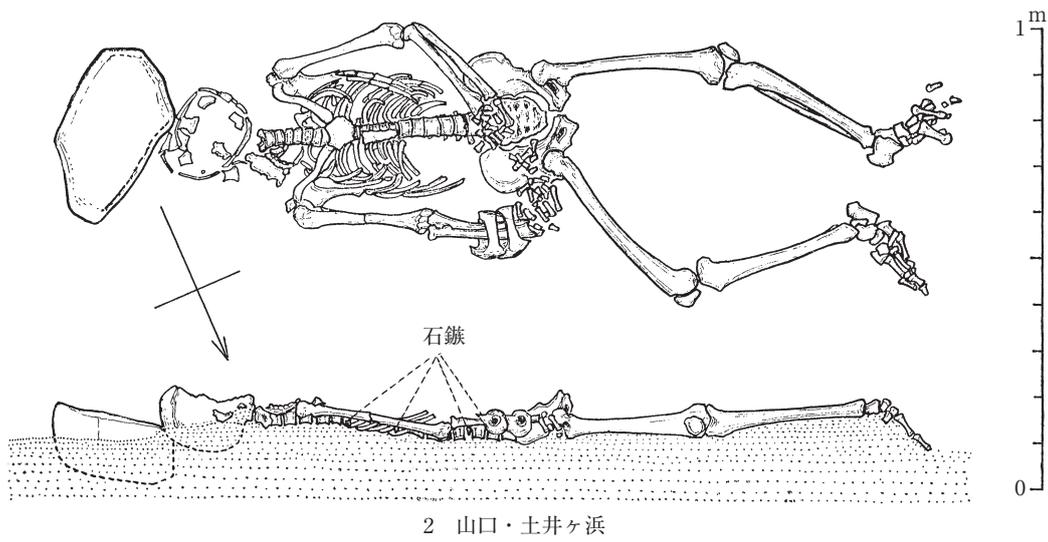
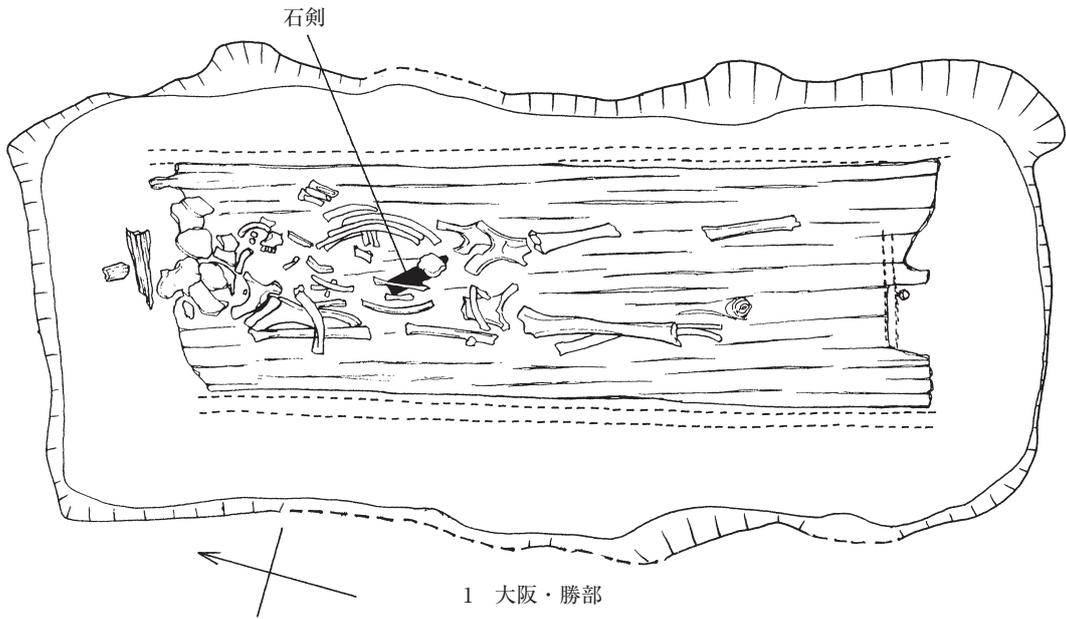
弥生時代の矢鏃の刺入例は、決定的な証拠を欠いているために、生前か死後かを判断することが困難であるけれども、上黒岩例や勝部例からすると、死後の儀礼的行為である可能性が大きいといえよう。

いずれにせよ、縄文・弥生時代の受傷人骨については、あらためてその意味を問わなければならない。

7 縄文草創期の位置づけ

最古の土器が1万年前をさかのぼることが判明してきたときから、当時の指導的な研究者を悩ませてきたのは、この時期の扱いであった。山内清男は「縄紋草創期」と呼称したが、その実年代を前3,000年前（のちに前2,500年前）と考えたので、新石器時代のうちに含めて済ませることができた。

しかし、炭素14年代を採用した研究者は、どんどん遡っていくその時期の扱いに苦慮することになった。旧石器時代と新石器時代＝縄文時代とをつなぐ中石器時代を採用するには、この時期の



1・2・14 磨製石鏃, 3~11 打製石鏃, 12・13 絞歯鏃

図 302 弥生時代の受傷人骨 [勝部遺跡発掘調査団 1973, 金関ほか 1961, 山田編 1999]

炭素14年代の測定値がヨーロッパの中石器時代よりもはるかに古い更新世末の12,400年前を示していたことから、違和感があった。

そこで芹沢は、縄文時代に編入することを断念し、福井第3層から上黒岩第6層までの隆線文土器群～無文土器群？（短縄文土器群？）の「約10,000～13,000年B.P.」の間を「中石器時代（晩期旧石器時代）」と呼んだ〔芹沢1967：241～242〕。そして、後になると「晩期旧石器時代」と呼び変えた〔芹沢1974〕。こうして、隆線文土器、有舌尖頭器、線刻礫は晩期旧石器時代に位置づけられることになった。

その一方、1966年に縄文文化以前の石器文化を「先土器時代」と提唱していた杉原は、先土器時代、縄文（土器）時代の呼称と整合させるために、この時期を原土器時代と呼んだ〔杉原1967〕。

しかし、芹沢の案も杉原の新称も学界では賛同者を得ることができなかった。彼ら以外の研究者は山内の「縄紋草創期」概念の提唱から実年代案を落として受け容れた。山内説を換骨脱胎した縄文草創期の呼称だけは、今日広く使われている。山内案や芹沢案に真剣に向き合わずに済ませることができたのは、日本の研究者の大多数はヨーロッパと対比する機会をもとうとしなかったために、深刻な矛盾に直面しなかったからであった。

縄文草創期を暗黙のうちに新石器時代に含めた結果、ユーラシア大陸の旧石器時代の概説や考古資料の比較からは、上黒岩の石偶（ヴィーナス）は、シベリアのメジンやメジリチとまったく同時期のことであるにもかかわらず、後期旧石器時代の日本列島にはヴィーナスは存在しないことになってしまった。1例をあげると、後期旧石器時代のアジアの呪具の分布図〔木村1992：47〕では、シベリアのマイニンスカヤの土偶は図示しているが、上黒岩の石偶はなく、縄文時代の呪具の分布図〔設楽1992：100〕のほうに上黒岩の石偶を図示しているという具合である。このことは、比較考古学という観点から望ましくないだけでなく、上黒岩の石偶の系譜や出自について考えるさいの障害にもなっている。

上黒岩の石偶は、かえって海外では炭素14年代測定値の $12,165 \pm 600$ 年前が重視されPleistocene Imagesの一つとして取りあげられるという結果を生じた〔Bahn1991：96～97〕。

「東アジアは東アジアで」だけでは、世界の先史時代における日本の旧石器時代～縄文時代の位置づけも定まらない。ヨーロッパや西アジアと対比するばあいは、指標を土器の有無などにおかず実年代を最優先し、さらに気候変動との関連を示しつつ各地域での多様な歴史を見直していくことが、いまもっとも大切な時期になっている。

1865年にジョン・ラボックが石器時代を旧新に二分したさいに新石器時代を旧石器時代から区別する指標は、磨製石器の有無、農耕の有無、絶滅動物の有無においていた。ところが、旧石器時代と新石器時代との間に断絶があることが認識されるようになり、両者をつなぐ文化の存在が明らかになり、沖積世になっても農耕をはじめていない時代を中石器時代と呼ぶようになり、1921年のジャック＝ド＝モルガンの著書で中石器時代の設定は決定的になった。

しかし、新旧の石器時代の区分原理をユーラシア全域に広げる過程で磨製石器の出現が新石器時代の初めよりも遅れる例が不都合が生じるようになり、その後、新石器時代を特徴づける要素として農耕・牧畜や土器などが追加されたが、追加要素がふえるに従って地方間のズレが大きくなり、收拾がつかなくなってきた。そこで、チャイルドは農耕を新石器時代の指標として採用する新案を

提出した。

ヨーロッパの最近の状況を南ドイツを例にとってみると、つぎのようである [小野 2000]。有畜農耕・土器・磨製石斧はセットとしてほとんど同時に出現するので、農耕の始まりを新石器時代の指標にしており、最古の線帯文土器が出現する 7,150 年前頃から早期新石器時代としていたが、最近ではそれよりも古い帯文土器の発見によって約 7,700 年前まで新石器時代の開始年代はさかのぼるという意見もある、という。そして、それ以前 11,550 年前までの約 4,000 年間は早期中石器と晩期中石器である。晩期中石器と早期新石器の境界は、古期アトランティック期と新期アトランティック期の境界に近い。そして、14,450 年前から 11,550 年前の間が晩期旧石器時代、それ以前が後期旧石器時代となる。後期旧石器と晩期旧石器の境界は最古ドリラス期とベーリング期にあり、晩期旧石器は植生区分のベーリング期の始まりから新ドリラス期の終わりまでの間である。中部ヨーロッパの晩期旧石器時代は、ベーリング期の始まりから新ドリラス期の終わりまで、すなわち最終氷期最後の寒冷期に相当するという考えが共通理解となっており、考古学的区分と植生の区分とはほぼ一致している。

しかし、晩期旧石器時代が始まる頃は、その前の後期旧石器時代とくらべて劇的な文化変化はまだ生じていない。そして、背付き尖頭器（日本の考古学では小型ナイフ形石器）から幾何形の細石器に移行するのが最古の中石器で、中石器時代の終わりまでの間に左右対称の三角形石鏃へと変化していく。フェーダーメッサー文化のニードービーバー遺跡から矢柄研磨器が出土していることから、弓矢の出現は背付き尖頭器が小型化した晩期旧石器末頃とされている。

ヨーロッパとならんで旧石器／新石器概念とかかわりをもってきた西アジアの考古学でも、旧石器／新石器の境界をひくさいの基準は、農耕の開始においている。細石器石器群の確立をもって Epi-Palaeolithic（かつては続旧石器時代と訳していたが、実際は 20,000 年前ころから始まる時代である⁽⁴⁾）ので、最近では終末期旧石器時代と訳している。そうであれば、晩期旧石器時代と訳してもよいことになる）を定義しており、野生ムギ類を刈り取り石皿・磨石を使って脱穀・製粉していたナトゥーフ期（14,700～11,700 年前）は、終末期旧石器時代に含まれる。西アジアで定住が始まるのはこの時期からである。そして、ムギを栽培し土器はもっていない PPNA 期すなわち先土器 A 期から新石器時代としている [西秋 2008 : 23]。牧畜は PPNB 期すなわち先土器 B 期に始まり、植物栽培と動物家畜化が定着した「本格的な新石器時代」が始まるのは 10,500 ないし 10,000 年前のことである。土器が出現するのは 9,000 年前ころである [Nishiaki *et al.* 2005]。

このように、中部ヨーロッパでは弓矢→農耕・土器・磨製石斧の順に現れる一方、西アジアでは、農耕→牧畜→土器→磨製石斧の順に現れる。農耕が出現する時期はヨーロッパと西アジアでは約 4000 年の開きがある。ここに日本列島をもってくると、「新石器時代」の始まりといっても、「どの地方で」「何年前」と限定しないかぎり、用語がまったく通じなくなる。

日本列島と同様、農耕の開始が遅く狩猟・漁撈に生業にしていたシベリア東部の沿海州では、27,000 年前から 10,500 年前までを後期旧石器、そのあと 9,500 年前までの 1,000 年間を「移行期」、そのあと約 4,000 年前までを新石器としている [小畑 2004 : 94]。「移行期」は中石器として扱うこともできるだろう。後期旧石器と移行期は細石刃を装着した槍の有無によって区別し、移行期と新石器は石鏃の有無によって区別しようとしているけれども、石鏃は後期旧石器の最後に現れる小型

尖頭器との機能上の区別ができないという難点がある。沿海州には現状では11,700年前頃に土器は出現するが、アムール川中・下流では約15,000年前の最古ドリラス期以前までさかのぼるので、将来さらに古くなる可能性が大きい。いずれにせよ、土器の出現はシベリアでも後期旧石器末の出来事である。旧石器・中石器・新石器の定義の難しさとそれを強調することが不毛の議論を導くおそれから、14,000～10,000年前の間の文化的な適応過程を「更新世／完新世移行期」という地質学的区分を借用した便宜的な文化段階として扱い、そのなかで細かな文化名や植生区分名を使って文化変化の実態を追究する立場もあろう。

にもかかわらず、「旧石器時代」「新石器時代」は世界共通の言語として重宝されていることは、確かな現実である。何か一つあるいは複数の文化要素で時代を区分しようとすれば、文化伝統も気候を含む環境がまったく異なる地域の間ではズレが生じて当然である。日本列島では磨製石斧はすでに約35,000年前に出現している一方、ヨーロッパではたかだか7,000年前にすぎないし、土器の出現も日本では16,000年前にたいしてヨーロッパでは7,000年前である。その一方、農耕の始まりは、ヨーロッパよりもはるかに遅く、3,000年前までさかのぼることができないのであるから、彼我の開きは大きすぎる。

しかし、植生区分にも示されているように、地球規模での温暖期と寒冷期のくり返しと文化変化の間に一定の関係が存在することは否定できない。ナトゥーフ期の始まりは、15,000年前ころのベリング期の気候の温暖化と湿潤化と関係があるという。日本の縄文草創期の始まりよりも約1,000年遅れているが、ナトゥーフ期の終わりは11,700年前の新ドリラス期の終わりとは一致し、同時に縄文草創期の終わりとはほぼ一致している。

最終氷期の最後に生じた温暖化現象は、単純ではなく、古ドリラス期の寒冷化、アレレード期の再温暖化、そして約1,000年間にわたる新ドリラス期の氷期なみの寒冷期を経たのちによりやく完新世の温暖期に突入した。ヨーロッパの晩期旧石器時代、西アジアの終末期旧石器時代、日本の縄文時代草創期は、14,800年前ころの温暖化が進むなかでのそれぞれの文化的対応を示しているとみてよいだろう。その意味では、世界共通用語の後期旧石器時代から最後の部分を切り捨てて縄文草創期と呼んで孤立化させるよりも、晩期旧石器時代の枠のなかにいれて、中緯度地方に位置し温暖化に起因する動植物相の変化が早く生じた日本列島の対応を世界の先史時代との比較において理解することの重要性を認識すべきであると思う。

さらに、縄文時代の初期についても、早く八幡一郎がヨーロッパの中石器時代と比較して、剥片石器の多いこと、それに礫核石器・礫塊石器が加わり、巻き上げ作りの尖底深鉢土器の出現、貝塚の形成が始まることなど、「中石器時代的様相」を認めたように〔八幡 1936, 1937〕、確かにその傾向をもっていることは否定できない。筆者は、岡山県牛窓町（現、瀬戸内市）に所在する押型文土器の時期の黒島貝塚を調査した経験をもっている。出土した遺物は尖底土器、石鏃、スクレイパーで、下層はヤマトシジミ、上層はヤマトシジミとハイガイからなるきわめて小規模の貝塚からは獣骨・魚骨の1片も見いだすことができなかった。その様相は、まさに北ヨーロッパの中石器時代文化〔クラーク（小淵沢）1989：68～69〕を想わせた。確かに押型文土器の時期にも、九州には熊本市瀬田裏遺跡や大分県日出町早水台遺跡のような、大規模な遺跡も存在し、前者には大規模な配石遺構を伴っている。しかし、それらは例外的であって、本州・四国ではこの時期は、上黒岩遺跡の状

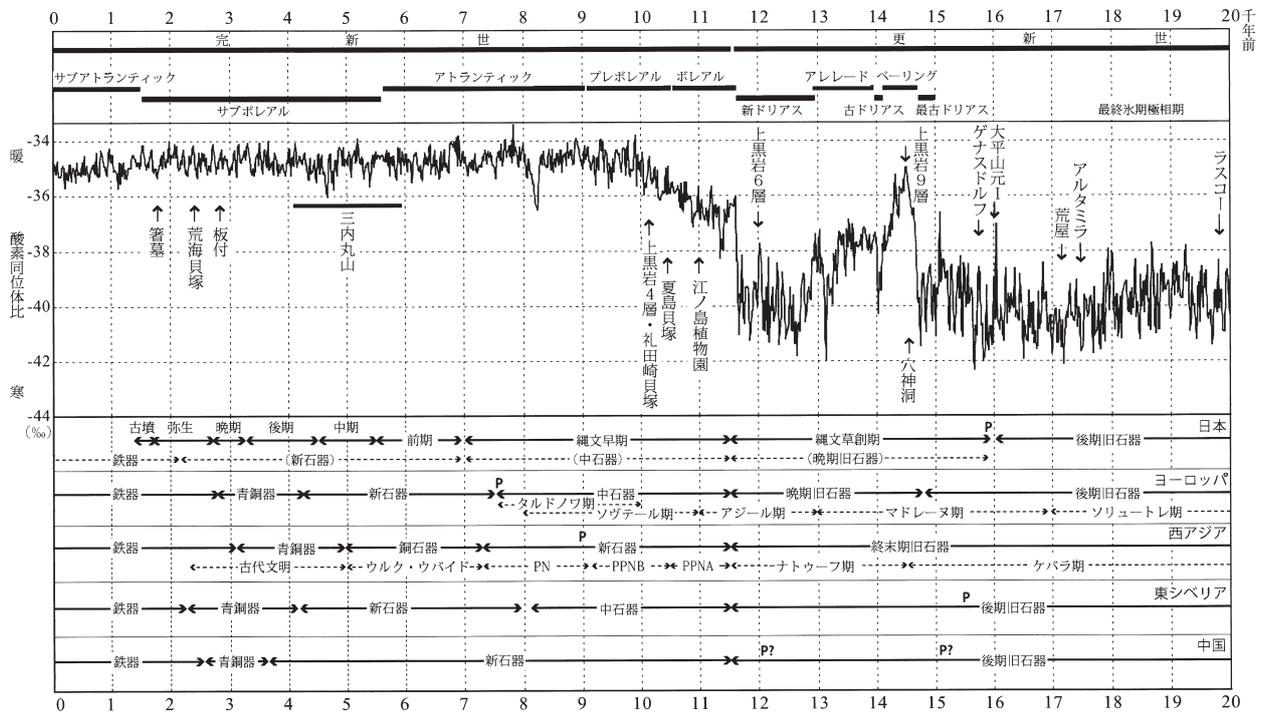


図 303 更新世/完新世の酸素同位体比変動（気温変動）[Stuiver et al. 1997] と日本・ヨーロッパの遺跡の年代およびユーラシア大陸の考古学的区分 Pは土器の出現年代（筆者原図）

況が示しているように、基本的に小規模なおそらく10人内外からなる小集団が広大な領域内で遊動生活をおくっていたと考えるべきであろう。

以上のような状況をふまえ、ここでは、ヨーロッパ・西アジアと対比するさいの、とりあえずの互換案を示しておきたい。

- 旧石器後期（38,000～16,000年前）：後期旧石器時代
- 縄文草創期（16,000～11,700年前）：晩期旧石器時代
- 縄文早期（11,700～7,000年前）：早期新石器時代（中石器時代）
- 縄文前期（7,000～5,500年前）：前期新石器時代
- 縄文中・後期（5,500～4,000年前）：中期新石器時代
- 縄文後・晩期（4,000～2,800年前）：後期新石器時代
- 弥生前・中期（2,800～2,200年前）：晩期新石器時代

1962年に始まり1970年に終了した上黒岩遺跡の研究成果の報告を以上で終える。調査後38年たったから、調査に参加しなかった者たちが集まって精一杯作成し刊行する報告書である。本書で提示した縄文草創期・早期の豊富な資料と考察が新たな出発点となって、上黒岩遺跡そして晩期旧石器時代から縄文時代の始まる時期の研究がさらに前進することを関係者一同願ってやまない。⁽⁵⁾

（春成秀爾）

註

(1)——私たちの調査に先だって6902号人骨の調査をおこなった山田康弘も、左右の寛骨に深い前耳状面溝の存在を指摘し、壮年女性である可能性がたつと、華奢な個体であることを指摘している〔山田2002:126~127〕。
(2)——ただし、骨器が刺さっていた6902号人骨の寛骨の孔については、この文章を書いているときに次のような問題があった。1969年に発表された速報の記述ではA孔に刺さっているが、写真ではB孔に刺さっている。そして、1970年の森本らの報告では記述、現場での人骨の出土状況の図ではA孔に刺さっている。ところが、1975年に開催された『縄文人展』の図録には、骨器をB孔に刺して撮影した写真を掲載している。記述のほうを優先するならば、骨器はA孔に刺入していたが、刺入孔が二つあったために現場で寛骨をいったん取りあげたあと、もう1度写真を撮影するさいに誤ってB孔に刺し

た、と解釈するほかない。『縄文人展』の図録の写真も、誤ってB孔に刺した撮影したものと推定する。なお、森本等の報告にはB孔が存在することについての記述はない。この事実から言えるのは、関係者も骨器が刺さっていた孔をしばしば間違えたというほど、B孔の存在は確かであるということである。

(3)——今回は、その観点から6902号人骨の各部分骨の調査をおこなっていないので、他の骨にも同様の傷が認められるかどうかについては、明らかにしえない。

(4)——西秋良宏の教示による。

(5)——筆者の執筆個所については、忍澤成視、小野昭、小畑弘己、木下尚子、工藤雄一郎、甲能直樹、小林謙一、辻誠一郎、永嶋正春、中橋孝博、西秋良宏、西本豊弘、早坂廣人、矢作健二、山田康弘、綿貫俊一、Simon Kanerの諸氏から教示を得たことを記し、感謝する。

参考文献

- 朝日新聞社編 1975『縄文人展』朝日新聞東京本社。
江坂輝弥 1974『土偶芸術と信仰』古代史発掘2, 講談社。
江坂輝弥・岡本健児・西田 栄 1967「愛媛県上黒岩岩陰」(日本考古学協会編)『日本の洞穴遺跡』224~236頁, 平凡社。
江坂輝弥・森本岩太郎・小片丘彦 1969「愛媛県上黒岩岩陰遺跡第四次調査速報」『考古学ジャーナル』第37号, 17~19頁, 巻頭写真。
江坂輝弥・森本岩太郎・小片丘彦 1970「骨器をとどめた寛骨を含む縄文早期人骨の二次埋葬例—愛媛県上黒岩岩陰遺跡第4次発掘人骨速報」『人類学雑誌』第78巻第1号, 60~61頁。
大賀 健 2004「匏状垂飾(石製品)」『季刊考古学』第89号, 37~39頁。
小片 保 1977「旧石器・縄文時代の人類」(日本第四紀学会編)『日本の第四紀研究』245~260頁, 東京大学出版会。
—— 1981b「日本古人骨の疾患と損傷」『人類学講座』5, 日本人I, 189~228頁, 雄山閣。
小野 昭 2000「氷期—後氷期移行期の環境と人類」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』992~1008頁, 東京堂。
小畑弘己 2001『シベリア先史考古学』中国書店。
—— 2002『東シベリア・極東における完新世適応システムの研究』平成11年度~平成13年度科学研究費補助金基盤研究研究成果報告書, 熊本大学文学部。
小畑弘己編 2004『極東および環日本海における更新世~完新世の狩猟道具の変遷研究』平成14年度~平成15年度科学研究費補助金基盤研究研究成果報告書, 熊本大学埋蔵文化財調査室。
梶原 洋 1998「なぜ人類は土器を使いはじめたのか—東北アジアの土器の起源—」『科学』第68巻第4号, 296~304頁。
梶原 洋編 1995『東アジア・極東の土器の起源—縄文文化の源流を探る』東北福祉大学。
勝部遺跡発掘調査団 1973『勝部遺跡』豊中市教育委員会。
金関丈夫 1975『発掘から推理する』朝日選書40, 朝日新聞社。
金関丈夫・坪井清足・金関 恕 1961「山口県土井浜遺跡」(日本考古学協会編)『日本農耕文化の生成』本文篇, 223~253頁, 東京堂。
金子浩昌 1967「洞穴遺跡出土の動物遺存体」(日本考古学協会編)『日本の洞穴遺跡』424~451頁, 平凡社。
北川博道・瀬戸浩二 2008「¹⁴C年代法を用いたナウマンゾウ化石研究への問題提起—瀬戸内海産標本の例を元に—」『日本古生物学会2008年年会予稿集』30頁。

- 木村英明 1992「呪具と装身具」(小野 昭・春成秀爾・小田静夫編)『図解・日本の人類遺跡』46~47頁, 東京大学出版会。
- 工藤雄一郎 2003「更新世終末から完新世移行期における考古学研究の諸問題—環境変遷史と考古学的時間軸の対応関係—」『古代文化』第55巻第6号, 315~327頁。
- クラーク, G. (小淵忠秋訳) 1989『中石器時代—新石器文化の揺籃期』雄山閣出版。
- 小林謙一・春成秀爾・今村峯雄・西本豊弘 2006「縄文時代草創期の炭素14年代測定」『日本考古学協会第72回総会研究発表要旨』69~72頁。
- 小林謙一 2007「縄文時代前半期の実年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第137集, 89~133頁。
- 小林達雄 1994「日本列島における土器の登場—はじめにイメージありき—」『縄文土器の研究』43~60頁, 小学館。
- 近藤義郎 1965「後水期における新しい道具」『世界歴史』第1巻, 先史の世界, 260~277頁, 人文書院。
- 佐原 真 1975「海の幸と山の幸」『日本生活文化史』1, 日本的生活の母胎, 21~44頁, 河出書房新社。
- 1987『大系日本の歴史』1, 日本人の誕生, 小学館。
- 設楽博己 1992「呪具と装身具」(小野昭・春成秀爾・小田静夫編)『図解・日本の人類遺跡』98~101頁, 東京大学出版会。
- 杉原荘介 1967「日本先土器時代の新編年に関する試論」『信濃』第19巻第4号, 245~248頁。
- 鈴木道之助 1972「縄文時代草創期初頭の狩猟活動」『考古学ジャーナル』第76号, 10~20頁。
- 芹沢長介 1967「日本石器時代と¹⁴C年代」『第四紀研究』第6巻第4号, 239~242頁。
- 1974『最古の狩人たち』古代史発掘1, 講談社。
- 谷口康浩 2005「極東における土器出現の年代と初期の用途」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』XVI, 34~53頁, 名古屋大学年代測定総合研究センター。
- チャイルド, V.G. (近藤義郎訳) 1964『考古学の方法』河出書房新社。
- 長井数秋編 2004『穴神洞・中津川洞発掘記録抄』城川町教育委員会。
- 西秋良宏 2008「縄文時代開始期と同じ頃の西アジア」(小林謙一編)『縄文時代の始まり—愛媛県上黒岩遺跡の研究成果—』20~39頁, 六一書房。
- 春成秀爾 2000「更新世末の大形獣の絶滅と人類」『国立歴史民俗博物館研究報告』第90集, 1~52頁。
- 2001「旧石器時代から縄文時代へ」『第四紀研究』第40巻第6号, 517~526頁。
- 2008「上黒岩ヴィーナスと世界のヴィーナス」(小林謙一・国立歴史民俗博物館編)『縄文時代の始まり—愛媛県上黒岩遺跡の研究成果—』40~72頁, 六一書房。
- 藤田富士夫 1996「ヘラ状垂飾についての一考察」『画龍点睛—山内清男先生没後25年記念論集—』173~180頁, 山内先生没後25年記念論集刊行会。
- 松木武彦 2000「戦死か刑死か副葬か?—棺内の石製武器からみた弥生社会像—」『シンポジウム 新方遺跡からの新視点 瀬戸内弥生文化のパイオニア』シンポジウム講演資料集, 69~76頁, 文部省科学研究費「古人骨と動物遺存体に関する総合研究」シンポジウム実行委員会。
- メドヴェージェフ, V.E. (梶原 洋訳) 1994「ガーシャ遺跡とロシアのアジア地区東部における土器出現の問題について」(小野 昭・鈴木俊成編)『環日本海地域の土器出現期の様相』9~20頁, 雄山閣出版。
- 森本岩太郎・小片丘彦・小片 保・江坂輝弥 1970「受傷寛骨を含む縄文早期の二次埋葬例」『人類学雑誌』第78巻第3号, 235~244頁。
- 八幡一郎 1936「日本新石器時代初期の石器」『民族学研究』第2巻第3号, 543~557頁。
- 1937「日本に於ける中石器文化的様相」『考古学雑誌』第27巻第6号, 355~368頁。
- 山田康弘 2002『人骨出土例の検討による縄文時代墓制の基礎的研究』平成12・13年度文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書, 鳥根大学文学部考古学研究室。
- 山田康弘編 1999『土井ヶ浜遺跡第17次発掘調査報告書』土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム。
- 綿貫俊一 2008「有茎尖頭器にみる縄文草創期の世界」(小林謙一・国立歴史民俗博物館編)『縄文時代の始まり—愛媛県上黒岩遺跡の研究成果—』107~123頁, 六一書房。
- Nishiaki, Y. and Le Miere, M. 2005 The oldest Pottery Neolithic of Upper Mesopotamia: New evidence from Tell Seker al-Aheimar, the Upper Khabur, Northeast Syria. *Paleorient*, Vol. 31, No. 2, pp. 55-68.
- Stuiver M., Grootes, P.M. and Braziunas, T.F. 1995 The GISP 2 delta 18 O climate record of the past 16,500 years and the role of the sun, ocean and volcanoes. *Quaternary Research*, Vol. 44, pp. 341-354.